

横濱康継：第22回（下田）大会を楽しむ

一昨年の第20回大会において、第22回大会の開催地が下田と決まった時、伊豆半島の突端近くの海辺へどれだけの会員が来てくれるか、そして小さな臨海実験センターで開催の準備ができるか、センター内には大会の会場になるような広い室がない等々、不安の種は尽きなかった。下田臨海実験センターは教官数4名（内1名は定員外）という小世帯であり、そのうち藻類学会員は2名、他に常駐の大学院生の中に数名の学会員が居るといった陣容で大会の準備を引き受けたのだが、本校のスタッフも支援してくれることになって、多少の精神的余裕が生まれた。

大会の準備は会場の選択から始まった。1983年9月に、北海道大学理学部附属海藻研究施設の創立50周年記念公開講演会と併せて、第7回大会が室蘭プリンスホテルで開かれている。先人の知恵を拝借してホテルでの開催を検討した。幸いにもセンターから徒歩でも自動車でも数分という至近の丘の上の下田東急ホテルがあり、しかもここからの眺めは絶景である。会場も2室確保できることがわかった。永年にわたり隣人として交流した実績にもよるが、参加者の宿泊はできる

だけここを利用してもらい、懇親会も開き、昼食もできるだけホテルのバイキングを利用するという条件で、会場費を低く抑えてもらった。他に休憩室や大会本部として使用する部屋は無償で、ロビーも自由に使えるという好条件が重なった。これはホテル側の好意もさることながら、石垣さんという担当者とセンター側の青木助手の人柄によるところが大であった。

ホテルの宿泊費も同ホテルの会員並みにしてくれたため大変廉価となった。しかもシングルからフォースまでと選択の幅も広げてくれたため、学生会員でも気軽に泊り、料金に含まれている朝食バイキングを海に見えるダイニングルームで、といったリゾートライフを満喫することが可能となった。

下田臨海実験センターは、下田湾の支湾である入江に面した、リゾートホテルの立地としても最高と言える場所を占め、入江の左岸には磯採集に最適な波蝕棚が広がっている。下田東急ホテルからはセンターと入江そして波蝕棚までを一望に収めることができるのだが、大会関連行事のエクスカージョンの1コースとして、その波蝕棚での採集を計画した。また波蝕棚の延



若手の会。全員集合！

長としての岩礁性の海底には、水深5メートルあたりまでをアラメ、それ以上深をカジメが優占し、それぞれが密な海中林を形成しているの、エクスカージョンのもう1コースとして海中林の観察を設定し、ワークショップも海中林をおもな対象とすることにした。

本誌第45巻第3号(1997年11月10日発行)掲載の大会案内に応じての事前参加申込は177名、講演申込は口頭発表54、展示発表31の合計85件となった。参加者は当日申込分を合わせると正規参加分だけで199名となり、これにオブザーバー参加者とボランティアスタッフとしての参加者を加えると222名となる。

会期は1998年3月25日(水)から同27日(金)としたが、25日は午後編集委員会と評議員会を開き、講演などは26,27日の両日に行うことにした。ひき続き28,29日にエクスカージョンを行い、ワークショップは30日までという日程となった。

リゾート地のホテルで開催されることになった本大会は「ゆとり」を特徴とすることにした。そのためにシンポジウムを省き、やや冒険的ではあったが展示発表を懇親会の途中で行って時間を空け、午前午後それぞれの時間帯に15分の休憩を挿入し、昼食時間は2時間にして、眺めのよいダイニングルームでのバイキングを楽しんでもらうように計画した。さらに26日午後には口頭発表を行わず、2時半からの総会と6時からの懇親会をA会場で開き、7時から8時までの間、隣接したB会場で展示発表を行うようにした。

25日午後には下田臨海実験センターで開かれた編集委員会と評議員会は無事終了した。翌26日は気温も高めで快晴の行楽日和となった。午前9時からA、B両会場で口頭発表開始。これまで午前の最初の講演は聴講者が少なめとなるのが常であったが、本大会では事



懇親会。西澤先生とともに乾杯の音頭。

前参加申込者の大半が9時前に受付を済ませ、ロビーや会場で待機するという状況となった。参加者の多くが会場と同じホテルに宿泊されたことが幸いしたと言えよう。

好天に加え、ホテルから見おろせる磯も大潮に近いということで、採集に出かけてしまう会員も多いのではないかと心配も杞憂に終わり、絶景を遮った暗幕の内側での講演と討論は熱気あふれるものとなった。しかし同日の午後は、6時に始まる懇親会までの間は総会のみということで、好天に誘われるようにして外出した会員が多かったようである。そのため総会への出席者は少なめとなり、また猪川倫好筑波大学教授の「お天気も良いことですので」という台詞で始まった名議長振りに、会費値上げなどの重要案件も無事通過し、1時間弱という異例のスピードで総会は終了した。

懇親会は出席者165名という盛大なものとなった。参加者中の最長老で元会長の西澤一俊先生は、下田に在任されたこともあり、最適者として乾杯の発声をお願いした。そして若手の女性会員やボランティアの女子学生も先生を囲むように登壇して、大変華やかなパーティーの開始となった。ホテル側のサービスによって盛沢山となった料理を賞味しながらの交歓が1時間ほど進行したところで、隣接するB会場での展示発表が始まった。昼食直後の空き時間を利用しての展示準備の段階から、各演題に関心を持った参加者と発表者との間の討論は個々に始まっていたこともあったためか、混乱もなく、アルコールは討論の賦活剤として作用した。ただ酒を飲んで討論などできるかとの声も1-2聞かれたが、討論が不可能なほどアルコールを摂取してしまった人物の言だったようである。

懇親会の後の若手の会は、休憩室を無償で借り、料理や飲物をそちらに移動する形で開かれたことに加え、世話人のセンター常駐院生の中村さんの努力があって、費用も非常に低額となり、自称若手を含む40名以上の若者達の交歓は、快適な室で深更に及んだ。

翌27日は朝から雨となったが、そのためもあってか、A、B両会場とも、時に席が不足するという状況のもとに活発な質疑が行われ、午後4時前に最後の発表が終了した。

エクスカージョンとワークショップの参加者は、大会終了直後の午後5時、ホテルの直下にある下田臨海実験センターへ集合した。参加者数はエクスカージョンの磯採集へ17名、海中林観察へ7名、藻場・海中林をテーマとしたワークショップに6名であった。

28日午前から、磯採集は千原光雄先生の指導のもとに、センターから至近の磯で行われ、ワークショップ参加者と合同の海中林観察は、前川行幸三重大学教授を中心とする指導陣の案内でスノーケリングによって行われた。午後は、エクスカージョン班は海藻標本作製、ワークショップ班は光合成測定の準備等にそれぞれ費やした。

宿泊棟食堂での夕食を兼ねた懇親会は、スタッフを合わせて50名ほどの規模となったが、水産庁遠洋水産研究所の池原宏二氏から寄贈された大量のメバチ（マグロの1種）がセンター技官の包丁さばきで盛りつけられた皿は、食卓を豪華なものにした。

翌29日にエクスカージョンは解散。ワークショップは光合成の測定などを行い、30日に解散した。

わずかなスタッフで準備を開始した本大会だったが、職員から常駐学生までの下田臨海実験センターの全構成員、筑波キャンパスからのスタッフや院生、そして下田から各大学等へ散ったOBやOG達と、多くの友人や教え子達に支えられて無事終了することができたといえる。発表内容も大変豊かなものとなったが、松江東高校生物部の3名の女子部員のオブザーバー参加はとくに心に残った。指導の先生達との共同の展示発表のパネルは多様な淡水藻の美しい光顕像で飾られていた。

本大会は成功であったと自賛したいが、やはり大勢の会員がはるばる下田を訪ねてくれたればこそである。深謝の意を表したい。

(415-0025 静岡県下田市5-10-1 筑波大学下田臨海実験センター)

須之内 千代：日本藻類学会第22回大会参加記

今回の学会参加は私にとって大変意味深く、しかも、楽しいものでした。おそらく、私に限らず、参加された全ての方々に、今回の学会は際だった印象を残したのではないのでしょうか。

まず、わたくしごとで恐縮ですが、今回、企業から参加させていただいた経緯を簡単に紹介させていただきます。

昨年1年間、私は卒業研究のため、下田臨海実験センターで過ごしました。中学時代に初めてテレビで知ったナマコという動物へのこだわりを追いかけて、ついにたどりついたのが、伊豆半島の突端にあるこの研究所だったわけです。

与えられた自然があまりにも豊かで、たった一匹のナマコがあまりにも不思議で、小さな下田という町に



口頭発表会場風景。